たまシネマ通信

Issue Vol. 01/2011

TAMA映画フォーラム
実行委員会

〒206－0025
多摩市永山1－5 ベルブ永山
（永山公民館内）

代表：042－337－6661
直通：080－5450－7204
http://www.tamaeiga.org/

特集Ⅰ 木村文洋氏インタビュー

TAMA 映画フォーラム特別上映会

『100,000 年後の安全』をめぐって

青森県六ヶ所村の核燃料再処理工場で働く労働者の内部被爆の問題を描いた劇映画『へばの』。本作は、二〇〇八年の第九回TAMA NEW WAVEコンペティションで上映された。世の中の原発への関心が高まる今、木村文洋監督は何を感じているのか？『100、000年後の安全』の感想、『へばの』の制作や上映などについてお話を伺った。

『100，000年後の安全』の感想

サ　ご覧になっていかがでしたか？

木村　今年の二月くらいに、上関原発が一回衆議院で差し止めになろうとしたじゃないですか？　その前くらいに阿佐ヶ谷ロフトで、鎌仲ひとみさんと飯田哲也さんのイベントをやっていて、『ミツバチの羽音と地球の回転』の公開前で映像も一緒にやったりしてて。そこで質問をしたことがあって。フィンランドで初めて最終処分地が決まったじゃないですか？　スウェーデンはまだ原発を結構使っている国なんですけど、「廃棄物の再処理が決まったのには国民の理解があるんですか？」っていう質問を飯田さんにしたら、それは日本みたいにこれだけ原発を使ってて、廃棄物がいざ出たんであなたたちが責任取りなさいよっていうんじゃなくて、北欧は国民と国の信頼関係がすごい強くて、そういう処分地が決まったんだみたいな回答があって。そのときびっくりしたのが映画でも出てくるんですけど、あの処分地に決まったところは地震がもう何年って言ってましたっけ？　何億？

オ　古生物代の…ほとんどテッパンというか全然地震なんか起こりえない地層ですね。

木村　そういう何万年というか…すみません、ちょっと単位は忘れてしまったんですけど、要するに全然地震が起こったことがない地域で、世界にそういうところがあるんだって正直びっくりしたんですよね。日本はマグニチュード五くらいの地震が毎年あるような世界四位くらいの地震大国で。フィンランドの処分地に、最新の施設ができるんでどんなものかなって興味津々で見たんですけど、やっぱり気の遠くなるようなっていうのが最初に見た実感ですね。

オ　そういう施設の映画としての描き方についてはどうでしたか？

木村　映画としてはどうなんですかね？　危険がどうとか管理がどうとかという科学的な話になるかと思えば、割と文学的な話になって（笑）。

オ　文学的というか哲学的な。だって結論が「忘れることを忘れるなだから」（笑）。

木村　まあでもそういう理解なんだろうなと思って。どういうふうに管理するかというよりは、十万年後の人類にどう伝えるかという話ばかりしてて、きっとそうなんだろうなと思って。だからあの監督も、遺跡に彫られた象形文字と同じ感覚で映画を作ってるんだろうなって。イベントの時に福島瑞穂さんが話してたんですけど、フィンランドは逆に欧米の核のゴミ捨て場みたいになったりしてて、それはそれで問題だみたいな。あの映画を見てて単純にいいなと思いましたけどね。最終的な答えというのが一番早く見つかって。日本は、まだ廃

木村 文洋（『へばの』監督・脚本）
1979 年青森県生まれ。大学在学中より映画制作を開始、同時に京都国際学生映画祭運営に携わり、国内外の映画の上映を行う。2003 年、『ラザロ -LAZARUS-』（井土紀州監督）の第一部「蒼ざめたる馬」篇の企画を立ち上げ、スタッフとして参加。2007 年上京後、『ラザロ -LAZARUS-』上映スタッフとして活動する傍ら、本作品の製作にかかる。尚、本作品が長篇初監督となる。
ブログ：http://ameblo.jp/bunyokimura2009/

棄物の最終処分地も決まってないじゃないですか？　まだ原発を増やすという話もしてるし。その現実の違いというのはいいなって思っちゃって。何がいいのかはわかりませんけど。

オ　北欧は徹底した情報開示がなされてるんですよね。北欧によっても違いがあるとは思うんだけれど。日本は（原発事故）一ヶ月目にメルトダウンしてましたという情報をようやく出してくるような国で。それを許容してしまってきてたんだな、私あるいは私たちはっていうふうにつくづく思い知らされて。

木村　処分地を作るにしても、アメリカとかは再処理をしないとかそういう上で候補地を探してたりしてて、日本の場合、再処理もやるし高速増殖炉もあるし、原発もまだやるしという。それで処分地決めさせてくれと言われてもちょっとわかんないよという話もありますよね。

オ　飯田哲也さんの結論を言うと、まずは原発を止めろと。止めてゴミ増やすなと。そこから話を始めようというスタンスなんですよね。道理に適ってるなって思いますけど。もんじゅもお金注ぎ込むだけ注ぎ込んで危なっかしいったらありゃしない。

木村　（東電の）株主総会のニュースとか泣けてきますよね。（原発撤退提案に対して反対の人が）五％から八％って。

『へばの』を撮るきっかけ

マ　木村さんはずっと青森にいたんですか？

木村　十八歳まで、弘前というところに。

マ　どういう動機で『へばの』を作ったんですか？

木村　実は僕は六ヶ所村に行ったのは二六歳のときが初めてで、二〇〇六年なんですよ。地元にいたときは知事が持って来たって親がぼやいてたことくらいは知ってたんですけど。全然意識も何もなくて。自分の県にああいう施設ができてるって、全く知らなかったんです。大学に入った頃くらいに、政治研究会の人に捕まったりして、原発の資料を読んだりしたことがあって、最初に読んだのが、浜岡原発で除染作業をしていて白血病で亡くなったという二九歳の労働者の話で。その方の最後の亡くなり方が、自分の部屋で真夏なのに震えながら亡くなったという。ベッドには白血病だからかわからないですけど黒い汗が染み込んでいて、影になって残っていたという。それを大学一年のときに読んだんですけど、結構どす黒く残ってて、それって結構昔の話なのかなって思ったら、その方が亡くなったのは一九九一年とかで割と最近だったんで、それが忘れられなかったんです。けど、かと言って大学の頃は何をするでもなく。普通に映画を撮っていたんで。いざ学校を出て映画を撮ろうとしだした時に、何を撮ったらいいかわからない時期が三年くらいあって、それでとりあえず自分たちが今どういう時代に生きてるかを映画にしてみたいと思ったときに、それを思い出して調べたら六ヶ所村にその施設があったことを知ったという。昔から（関心が）あったとかそういうんじゃなくて、映画と原発の話がずっと切り離されてたんですけど、あるときに急に交錯したみたいな。わけのわからない映画を作ったんですけど（苦笑）。六ヶ所村にも行ってからまだ四、五年くらいしか経ってないんですよね。結構離れてるんで、弘前と六ヶ所村が。車で三時間くらいかかるところで。

サ　弘前にいたころには、関心はまったくなかったですか？

木村　そうですね。親がぼやいてたくらいで、なかったですね。

オ　二〇〇六年と言ったら鎌仲さんの『六ヶ所村ラプソディー』が公開になるかそれくらいの時期ですよね。身の回りではどうでしたか？

木村　実はうちの高校から再処理工場の原燃で働いてる人は結構いて。それ（原発問題）って年齢とともにみんな知っていくという形なんですけど、十代の頃は正直話題にもなってなかったと思います。まだ建設されてる途中だったし。知ってる人は当然知ってるんでしょうけれど。

マ　離れた場所だとそういうリアリティというものはやっぱり感じにくいものですか？　僕なんかはずっと東京にいたので、まったくそういう問題意識みたいなのはなくて。恥ずかしながら三、一一以前に『へばの』を見て正直よくわからないなという感じだったんですけども、改めて見るとリアリティみたいなのが全然変わっちゃって、まったく違う作品じゃないかと感じてしまったくらいで。

木村　おっしゃる通りで、多分青森の人も、一度終わってしまった話だったと思うんですよ。一度反対運動が盛り上がった時期もありますし、何十年と続けてるおじいちゃん、おばあちゃんという年代もいると思うんですけど、一旦あそこに誘致して建設が始まったら、仕方がないんだからこのまま行くしかないということで、そんなに議論にもならずに。弘前という離れたところでも知ってる人は知っていても、うちの親とかも全然知らないですからね。うちの父親だと逆に「（そんな施設が）できるんだ」とかよく知りもしないくせに言ってたりするんで（苦笑）。一度完了した話だと思うんです。

オ　鎌仲さんの『六ヶ所村』でひどいバトルをやってるシーンありますよね？　漁師さんたちが「建てるな！」って言ってる。一番やってる人が今どうなの？ってインタビューに出て来た覚えがあるんだけれど。その完了したというのは、要は八十年代あるいは七十年代末に原燃が来るんだって言ってたときに反対してた人でも、結局はできちゃったならしょうがないというふうに受け入れざるを得ない状況になったのか、あるいは自分たちでチョイスして来たのか。

木村　（六ヶ所村の核燃料再処理工場の）試運転が始まってから被曝した人と被曝した疑いのある人が三、四人くらい出たんですけど、その方たちの存在というのも、東京の新聞だと四コマ漫画の下にちょろっと載るくらいで。『へばの』にあるような物語っておそらくひっそりと俎上に上げられるような話で、ちょっと耳を澄まさないと聞こえないくらいの話だと思うんです。

原発を描く

オ　木村さんだったらあの『100，000年後の安全』のオルキルオトという素材をどのように撮りますか？

木村　地元民の話を撮りますね。どういうふうに生活の中で考えて理解して生きてるのかというのを。

オ　開発した人の話しか出てきませんからね。それはフィクションで撮られますか、それともドキュメンタリーで撮られますか？

木村　ドキュメンタリーじゃないですかね？　淡々とシナリオ書かずに撮るみたいな。まあ撮れないですけどね。

サ　『へばの』は劇映画ですけど、それはそれまで劇映画を撮っていたからですか？

木村　主人公の女の子に対してスタッフでシナリオを考えたときに、自分たちの人生を投影で

『へばの』(2008 年 / 日本 /DVCAM/81 分 / 制作・配給 :team JUDAS)
脚本・監督：木村文洋　出演：西山真来、吉岡睦雄、長谷川等、工藤佳子

青森県六ヶ所村。そこに住む紀美は、再処理工場で働く治との結婚を間近に控えていた。創設から工場に携わっている父・大樹（だいき）と親子二人で暮らしてきた紀美は、治と新しい家庭を築いていくことにささやかな幸せを感じていたのだった。ある日、治は作業中にプルトニウムの内部被曝に襲われる。大樹は二人の間に生まれるであろう子供に、被曝による影響が出ることを案じて、二人が結婚することを反対する。紀美はそれでも治と一緒にいることを願うが、紀美の想いを打ち砕くようにして、治は突然姿を消してしまう。

三年の月日が経ち、紀美は静かに生活していた。その周囲で、突然治が戻ってきたという噂が囁かれる。それを聞いた紀美は、あてもなく治のことを探しに出てしまうのだが……。

きたり。僕らは六ヶ所村に住んでないし、離れたところに立ってるんですけど、主人公の行動とかを考えることで、あそこに立てるのかなって思って。ドキュメンタリーだとそこに立ってる方を撮ることになるんで、もちろんそれでもシナリオを書いたりってできると思うんですけど。自分たちならどうやってあそこに立つのかっていうのを考えたときに映画として、三年間待って最後に子供を産むっていう、特に話もないような話ですけど、そういうことができるっていうことなんじゃないかって。

サ 『へばの』を当時撮ったときと、原発事故が起きてしまった後では描き方は変わりますか？

木村 やっぱり事故が起きてから一ヶ月くらいは精神的にきつかったんですよね。いまもどんどん被曝してる労働者の方が福島にいますよね。あの殺された彼（治）についてどれだけ考えていたんだろうって。これからも何年かかるかわからない冷却作業の中で、（基準が年間）二五〇ｍＳｖじゃないですか。あれって本当に今まで日本の労災史になかった。さっき話した白血病で亡くなった人って、九年間で五〇ｍＳｖとかで亡くなってるので。

オ 『隠された被曝労働』っていう作品があるんですけど、この間そこで見た気がする。二九歳で亡くなって、その遺影を持ったお父さんとお母さんが写真とか旅行とか本が好きでって、息子さんの部屋でずっと話すんですよ。

木村 ちょっと話を戻すと、撮った当初言われたのは、プルトニウムを吸い込んだくらいで女のところから逃げないでしょっていうような。それでも子供を産んでいる人だっているし、意志が強かったら一緒にいるじゃないって。世の中の公害とか労働ってキツいものはもっとあるし、何で逃げるの？っていう話も結構されて。それは自分の中であの映画を作ったときから、割と課題だったんです。実際福島であいうことになったときに、放射線について敏感になったりするんですけど、それは僕自身は一人なんでいいんですけど、実際に小さい子供がいる友達とかストレスが全然違うなって思って。米を炊く水も変えたり。この状態がいつまで続くんだろうとか、それなら周りに後ろ指を指されようが関西に移住したほうがいいだとか、そんなことをずっと考えてたら、（『へばの』の）彼はあの家族と一緒に考えていくことが嫌になって逃げてしまったんだとか、やっぱりもうちょっと誰かと出会わせるべきだったとか思って。今だったらいろんな描き方に対して変わるんだろうなって思います。映画から復讐を受けてるような感じで。あの映画を作ったときに考えたことの基本は変わってはないんですけど、やっぱり違うものが見えて来たっていうのはありましたね。

次回作について

オ 次の映画は計画されてるんですか？

木村 そうですね。準備をしてます。六ヶ所村から父親と娘をおいて置いて出てきた母親とお兄ちゃんの話を次やろうかなと。

オ でも何か私は、逃げるっていうのも自分に真面目っていうか誠実な生き方だよなって思いましたね。結局最初に殺されちゃう彼も、何を持って誠実っていうかわからないけど、それも誠実な生き方じゃないかと思ったりして。逃げたくなっちゃうだろうし、逃げるっていう自分に真面目というか正直というか。

マ 『へばの』の最後のテロ行為みたいなシークエンスがあるじゃないですか。あれはどういう？

木村 誰かが持ってたということなんですけど、プルトニウムって絶対漏れない漏れないって言っても海からも漏れるし、いずれ東京にも出ていくっていう。それがブリキ缶に入ってそこにあるのかわからないですけど。実際どうあっても勘定合わないらしいです、海外のデータだと。

マ 撃たれたのも、今でこそ深読みを逆にしちゃって、結構、暴力団とも関係を取り沙汰されてるじゃないですか。そういうのを込めたのかなと。

木村 鳥が撃ち落とされるシーンが一応あるんですけど、イギリスの再処理工場で排気筒に鳥が群がってるらしいんです。そこが温かいんで。そうなると鳥の羽が汚染されるらしいんですよ。その羽が村の畑とかに落ちると汚染がどんどん広がっていくんで、再処理工場では敷地から出ないように撃ち落とす職業っていうのがあるらしくて、イギリスの敷地内では鳥の死骸が堆く、低レベル放射性廃棄物扱いらしいんですけど。そういう意味合いで彼も出るなっていう、そういうシーンも撮ってたんですけど切っちゃったんで。

『へばの』の上映について

サ 『へばの』を（ポレポレ東中野で）公開した後、上映活動は続けていたんですか？

木村 結構やりましたね。今年三年目ですけど、東京でも去年はアップリンクでやったりとか。ノー・ニュークス関連で一回やったりとか、割とまぁいろんな所で神出鬼没的にやってますよ。

サ なるほど。震災以後に上映会は増えたりしましたか？

木村 増えました。最初に東京で自分たちでやってみようってことで、一日だけやったんですけど。大阪、その後山梨に行って。来週は富山にも行きます。震災以降で四ヶ所ぐらい、七月後半には名古屋でもまたやります。そんなに大規模な上映じゃないんですけど。

サ 上映会でお客さんの反応とかは、震災以前と以後では違いますか？

木村 泣く人がちらちら多く見るようになりました。福島にご家族がいらっしゃる女性の方とか見にきてくださって。座談会を五月の上映の後にやったんですけど、ものすごい複雑な今の心境を吐露してくれたりとか。

オ この間アースデー関係で福島のお母さんと子どもを二十人ぐらいずつ呼んで、一日だけの息抜きに支援金からお金を出してご招待したんですけど、避難するって言うと家族からやっぱりちょっと…って言われるけど、一日だけ息抜きに行ってくるって言ったら出やすかったって。福島市なんかでも外で遊べる時間が今、制限されているじゃないですか。でも東京に来たら裸足で歩けるとか、外を歩けるっていうのが嬉しいらしいんです。閉ざされた所にいるストレス障害の方がまず来てるっていう。放射能、放射線だけじゃない、作品の中ではお母さんと息子がっていうのもあるし。

木村 放射線うんぬん以上に、おっしゃるとおり、隣人との価値観の違いがあって。それって三月一一日以前も上関の状況とか見てると、そっちのほうがはっきり言ってキツいですよ。

マ そういう人の分断を起こしちゃうっていうのが、すごく残酷な存在ですよ。元々あったような分断が、顕在化してきちゃったっていうか。対立を煽られちゃうようなところがあるっていうか。

オ 伊方原発で訴訟をやってた人は今どうなってんだろうなって。あれもかなり反対運動があったっていうのを「25年目のチェルノブイリ」の特集かなんかで初めて知ったんですよね。

木村 「ゴミをもう出さないようにしよう」って、それが最近ネットでは、子供でも言える理屈だって書かれるんですけど、その子供でも分かるような話をなぜ考えないの？って。

オ 子供のほうが正論言ってるよって。

木村 いろんなことを盾にできますけどね。たしかに、原発使わなかったら燃料費かかって日本の経済がまたダメージ受けるとか、電気が不足して死ぬ人もでるとか。

マ ああいう対立をみると、暗澹たる気持ちになりますよね。

オ どうそこを切り崩していけるかだなぁと思うんですよね。どこかにはヒントはあるはずなんだけど。

サ 本日はお忙しいところ、ありがとうございました。

（二〇一一年六月三十日新宿にて聞き手　実行委員三名）

特集Ⅱ　～実行委員座談会～

ＴＡＭＡ映画フォーラムでは今回の上映に先駆け、この映画の試写会を行いました。その後、委員有志が座談会形式で語り合った様子を公開します。

出席者　男性五名　女性二名（司会・本紙編集長）

サ　映画を観ていかがでしたか？

ヨ　雰囲気が『２００１年宇宙の旅』みたいな映画だと思った。穴掘ってるところとかが『２００１年宇宙の旅』っぽくて。トークしてるところを除けばね。

サ　作品のテーマについては？

ヨ　テーマというか原発問題でいいのかな？　過剰に反応してる人と楽観視してる人のギャップが大きいかなと思った。いままで経験してないことをやってるわけだから、すごいそれを重視する気持ちもわかるけれども、過剰に反応してる人たちってのは原発問題それ自体を問題にしてるんじゃなくて、ただ騒ぎたくて騒いでる人たちもいるのかなと。いわゆるプロ市民と呼ばれるような原発問題に託けて、自分たちの情報を誇示してるんじゃないかと。大抵そういうの騒いでる人たちって、例えば原発の問題で、半減期とは何かとかさ、単位がちゃんとわかってるのかとかさ、そういうのは感じるんだけど。何か過剰に言葉だけ捉えて、何とかの何倍ですという数値だけ捉えて問題にしてるのはおかしいかなと。

ワ　まず反核の映画かなと思ってたんですよ。これは勝手な思い込みなんですけど。だと思ったら、そこから一歩前へ進んで、核は使わなきゃいけないからそれをどう処理するかっていう、日本では踏み込んでいない次元に踏み込んでいて、何か逆に衝撃を受けたみたいな。しかもまた氷河期が訪れて、全く違う人類が出て来て、言葉も通じない奴らにどうやって核の恐ろしさを伝えるかっていう、日本というか世界の二、三歩先を行っている議論をしていること自体、同じ地球に住んでいる人たちがそういうことをやっていることがすごいなって思ったし、その切り口に驚いたのが素直な感想というか。

ク　（都合で試写は）最初と最後しか観れてないのですがＮＨＫの50分版も観たので感想を。ドキュメンタリーでも色合いとか全体的に北欧センスだなって感じたり、ものすごく非現実的なことを話し合ってるなとも思ったりもしました。あとドキュメンタリーとしては、インタビューだけで繋いで面白くするのは難しいなというのを感じてしまって。

サ　僕の感想を言うと、かなり哲学的というか根本的なテーマを扱っているように思いました。原発とか原子力を利用することは実際問題、現実的にはかなりの問題を孕んでいるんですけど、根本的に原子力エネルギーと人間は付き合えるのかどうかということを問いかけているのかなという印象を受けて。生物に無害となる十万年後まで保管するってすごいＳＦ的なことで、想像を超えた話が現実的に進行しているということが驚きですね。僕はそんなことは、まぁやんない方がいいんじゃないかっていうか、そこにそんなに頑張るんじゃなくて、そんな大変なことをするんだったら、他のやり口で、原子力使わない方がいいんじゃないかという個人的意見はあるんですけど…という感じです。

オ　この上映会の企画者である私が実は企画書を出すときにすでに話をしたんですが、最終処分地の話は私が徳島に居たときに体験してるんですよね。二〇〇六年の年末だったかな？　高知県の東洋町というところで、そこが最終処分地に立候補しかけたということがあって、そのときに東洋町の人たちはのほほんとしてたんだけども、周りが「とんでもない！」ってことでみんなで寄ってたかって辞めさせたっていう経緯があったんですね。最終処分地に名乗りを上げるだけで、年間十億円、二十億円という交付金がただで降ってくる。文献調査だけで。過疎で悩みまくっている東洋町なんてところにはとてもおいしい話で、ただ東南海大地震が五十年のうちに必ず来ると言われる場所に、しかも海の中に処分地を作るということは非現実的な話であって、四国四県の知事が揃って遺憾の意を表したということがあったんですよ。その前に実は高知県の西の方の津野町というところでも最終処分地の候補地に立候補しかけたということがあったんですけど。私にとっては、今回の映画は、「あの最終処分地の話ね」という、最初から知ってた話でした。ただだったら愛媛県知事は伊方原発って四国唯一のプルサーマルまでやってるところの原発を止めるかっていうところまでせず、過疎対策もするかと言ったらそれもせず、でも十億円、二十億円が降ってくるっていうことはありがたい話なんですね。で、この映画を観たときに、無茶をやっているけど徹底してこれを論じているフィンランド人ってすごいって思ったんですよ。で、後から読んだ話では、すべて情報公開をして、しか

もたった四基の原発の最終処分地をやっているんですよね。日本は五四基ですよね？　ただあそこに出てる人たちは、日本で言えば原発推進派の人たちにも思えるわけで、推進派の人たちをもってしてもあれほどに悩ましい発言をせざるを得ない。かたや日本はどうなんだろう。ここまで情報が公開されているのかっていう思いとか。そんなのが四月の五日頃に観たときに思ったんですよね。その頃はまだ日本の中で安全デマというのがはびこってたときですよね。まだメルトダウンを認めてないときです。けど、私は綿井（健陽）さんの話を伝え聞いていて、メルトダウンしてるっていうのは知ってたので。「あぁ人間モルモットになってるのね」っていうのは思っていました。で、十万年後まで責任は取れないけど、次の世代に「ごめんなさい」って何万回言っても足りないくらいの事態を私たち大人は引き起こしてしまっていると私は思っていて。それを一回でも減らすにはどうしたらいいだろうって。だったらこの核のゴミ、これは推進派であろうと否定派であろうと誰も逃れられない。じゃあそれどうするの？　ゴビ砂漠に押し付けていいの？って。そこもちゃんと逃げずに論じないとだめなんじゃないのって。チェルノブイリから二十五年経って、向こうでどれだけ悲惨な事態になっているかということは、広河（隆一）さんの「通販生活」の連載でここ二十年くらいちらちらと読んで来ているので、四十代の私が還暦になる頃にはとても大変なことが起きるのではないかと予測がつくのだけれど、それはそれで別としても、せめて核のゴミなんとかしようやっていう気持ちがあって。それも込みで原発必要か議論しようっていうふうに思ったので企画書を出したんですよね。要るなら要るで、その数値的なものだとか、その合理性だとか感情論はあるけれどもちょっとそれを置いておいてどっちの方が経済効率がいいかっていうことをなるべく冷静に話し合いません？っていう思いで、実はドキュメンタリーって合うのかなって思って。あの中では実際はもう結論が出てるんじゃないかと思ってるのだけれど。

ミ　何でフィンランドの人たちはそういうふうに話し合ってて日本人は話し合わないのですか？

オ　情報をきちんと公開するというところに、日本の中ではあまりできていないんじゃないかと思いますね。すべてを公開するということが、漠然とした言い方だけれども、日本の風土に馴染んでいないというか。

ミ　公開されていないことに、僕らは不満を持っていないということですかね？　それとも公開されてるって思ってますかね？　僕らは、中国を見て不自由な国だなって思うじゃないですか。だから何なんですかね？　その差というのは。フィンランドの人たちは話し合うけど、日本の人たちは話し合わないというのは。

マ　ものすごく根本的なことを言っちゃうと、例えば民主主義っていうのは、主権在民で。本当は、我々が自覚的になって政治を動かしていくっていうのが大前提なわけだと思う。そのためにはやっぱり情報は全部公開しなきゃいけないんだよ。だってそうしないと判断できない、自分たちが。でも、結局民主主義って…俺、明治維新とか全然評価してないんだけど、本当は元々日本が培っていた政治的な方法論とかもあるんだけど、そういうのも全部捨てちゃって、（民主主義を）形だけポンって作っちゃったから。だから何というかその空白が生じる中で社会が動いてるっていう感じがするけどね。

オ　一つ言うと、ディベートの空気や感覚ってないじゃないですか。Aという一つの議題についてイエスとノーがあって、イエスの人とノーの人が徹底的に議論して、けど議論の後はちゃんと仲がいいっていう素地が作られてない気がする。議論の仕方が出来ていない。

マ　例えば、向こうだと弁証法っていうのがあって、テーゼ、アンチテーゼ、そしてジンテーゼに到るっていう、市民生活からボトムアップで培って来た知恵みたいなのが、多分あんまりないから、日本人が議論しちゃうとテーゼに対してアンチテーゼだけぶつけちゃって、そのもう一段上に行かないなっていうのがすごく感じるね。

オ　生活してたら、例えば誰かのここがいい、ここが嫌いっていうのは是々非々があるじゃないですか。だけど、こういう議論になると是か非かしかない。例えば、この間地下原発を作るっていう話になったとき、（それは）亀井静香さんが言い出したんですね、私、「バカじゃないの？静香ちゃん」って思ったんだけど。でも彼が言ってる死刑廃止の議員連盟の動きにはすごい賛同してる。だから一人の人の話に対して、是もあれば非もあるよっていう。それともう一つ、ノルウェーの事例なのだけれど、犯罪も加害者も被害者についても徹底的に議論するっていうのができてるんですよね。それは、ひょっとしたら北欧だけかもしれないけれども、その徹底的に議論するということに慣れているか慣れていないかの違いがとても大きいなと思う。あと、日本人は忘れっぽい。もう七月九日の時点で原発問題を忘れちゃっ

てるんじゃないかなっていうのを私はすごく懸念してるんですけどね。

サ　人それぞれどのメディアに接しているかによって温度差が結構ありますよね。新聞、テレビしか見ない人とネットメディアを見てる人と。

ク　それが地震で表面化したみたいなね。元々そうだったのが、「あ、こうだったんだ」と見えるようになったというか。

マ　原発問題でいろんなことが可視化してきたみたいなことが。

オ　例えば、最終処分地の話はみなさん知ってました？　四国で大騒ぎになっていたという話。あのとき鎌仲さんが来て、四国をキャラバンされたんですよ。『六ヶ所村ラプソディー』を上映して歩いて。鎌仲さんが「日本人って賢いからさ。技術あるからさ。きっと原発に頼らなくてもやっていけると思うんだよ」って直接みんなが話したときに言っていて。それが『ミツバチの羽音と地球の回転』に繋がったんだなって、去年観て思ったんで。その他のエネルギーがあるんだよって知ってる人たちにとっては、こんな最終処分地のドキュメンタリーっていうのは、いまさらな感があるだろうし。

ク　でも全然知らない人たちにとっては。

オ　すごい衝撃的だと思いますよ。

ワ　僕は実家が福島なんですけど、福島に行ったときに、原発の問題が表面化する前に、第一原発、第二原発の汚染水が流れているっていう情報を隠してますっていうニュースは、毎日のようにやってたんですよ。だから「またか」みたいな。むしろ「またか」って言う人が珍しいくらいで。何でみんな興味を示さないんだろうっていう感じだったんですよ。

オ　日常茶飯事だったんだ！

ワ　当たり前みたいな。本当にそんな感じで。だから関心がないのかなって。ＮＵＭＯの広告とかも全国紙に載ってましたよね、僕は逆にそれに関心が湧いたんですけど。じゃあ周りの人が関心持ってるかと言えば関心なかったし、原発あるの？みたいな。福島県内でも、僕は中通りというところに実家があったんで、本当に浜の方の浪江とかあるところじゃないと、いやあるところでも関心があったのかな？って。本当に関心がないというか、他人事みたいなところもあったんじゃないかというのを非常に感じますね。

オ　それは沖縄でこれだけのデモがありましたよっていうのを東京でのニュース発信で何もないみたいなのと同じかなってふと感じたんですけど。地元では当たり前みたいなことが（全国区のニュースでは）拾われない。

ク　地元（福島）でも少数は反対してる人たちがいるんでしょ？

オ　それはプロ市民という人たちじゃないですか？

ワ　逆に、反対するとプロ市民みたいな人にカテゴライズされちゃうんですよ。

ミ　そういうことを言う人たちってまだ少ないんじゃないですか？「プロ市民」とか言うような人たちが。反対する人たちじゃなくて、反対する人たちに「あーだ、こーだ」言う人たちっていうのはまだそんなに多くないかと。

マ　でも、それは、多分サイレントマジョリティ…。

ミ　そこまで多くないと思いますよ。ネットが出ていま多く見える気がするけど、そんな多くないですよ。でもそれが多数派だとしたら、民主主義で言ったらそれに従うしかないんじゃないですかね？　敢えて言うなら。

ク　その多数派の人たちの本音のうちは、本当は違うんじゃないですかね？　隣に合わせとかないと自分も叩かれるからっていう。本当のことを人に聞いてみたらそうじゃない場合もあるかなって。

オ　隣に合わせるのは田舎での生存戦略の大前提ですからね。

マ　敢えて言うなら、少数意見の尊重も民主主義だからね。そこは徹底的に議論してるかといえばしているわけじゃない。結局日本で議論は意味がないなって実は俺も思ってるから。だから何というか、議論というより、対話っていうイメージで話し合ってもいいんじゃないかと思うんだよね。議論っていうと、どうしても相手を負かせよう、負かせようとしちゃうから。対話っていったら相手の意見を引き取って、それをどうしていくかっていう。そういう姿勢で話し合っていく方法を作っていかないと後々また大ダメージを受けてしまうんじゃないかって気がするんだよね。

ミ　難しいですよね。議論するような国になれるかと言えばなれないと思うんですよね。それは、例えば民主化する前の段階から、いろんな国がヨーロッパとか民主主義がそういう段階をたどって来たわけじゃないですか。じゃあ同じ感じで日本はそれに対して前近代かといえばそうじゃないし、そういう国ならそういう国なりの解決法って…。それは本当に難しいことだと思うし。放射能で汚染した土地で暮らしてて、それなりの被害が出てて、死んで、でもそれはそれなりに幸せですって言う人がいたら、そ

れは違うだろって言ってその人が不幸せになるとまで言えないですよね。

オ　幸せ感ってすごく難しいからどこまでそれに立ち入るかって…。それにしたって、情報公開ありきの話なので。その上で「あなたどうします？」っていう話だから。国民投票してイタリアが脱原発を決めたということを受けて、日本だったらどうなるかって。脱原発するならするで、そのための数値であり経済効率でありということの共有化が全然進んでないなって思うので、これを機に勉強しましょうって。それでどう舵を切るかは、みんなで決めたらいいじゃんって私は思ってる。

ミ　フィンランドってそういうことに対しての国民の意識って元々あるんですかね？　例えばイメージですけど、イタリアの国民ってあまり考えているとは思わないんですよね。

オ　いや、けどチェルノブイリショックはすごいのよ。私自身一九八八年にグルジアに行って、いまだにガンになってないの不思議だと自分でも思うくらいだから。ジャムをたっぷり食べて来てますからね（笑）。だから、どこまでの情報開示を受けての脱原発なのかは確かに知りたいところではありますよね。感情論からなのか。

ミ　友達が外務省勤務で、今アメリカにいて、ちょうどビンラディンが死んだときにホワイトハウスにいて、そのときの盛り上がりっていうのをツイッターで報告してて、「U・S・A、U・S・A」って言ってる奴らが結構いるって。あれはノリでとりあえず裸になる奴がいて、それで「ワー」っていう感じで盛り上がってるって。

オ　それって阪神タイガースの優勝と変わんないじゃん（笑）

ミ　本当そうなんですよね。それがそういう形で出て、あれはあれでいいと評価する人がいるわけじゃないですか。ある程度考えてたのは、ハイパーじゃなくてスーパーナショナリズムっていうやつですよ。明治維新と敗戦で、革命というか変わっているんだけれども、それを自分たちで選んでいるわけじゃないっていうのを。

マ　結局市民がいないんだよね。市民がいなくて庶民しかいないって言ってて。歴史の分断があると思うんだよ。

ミ　歴史っていう言葉の分断であって、本来の意味での歴史の分断じゃないかもしれないって。

オ　本来って何なの？

マ　いやまぁわかる、わかる。繋がってる部分っていうのはあるんだよね。あるけど…。

ミ　形容詞的な意味での歴史というか。

マ　もちろん実質的に繋がってるし、繋がっている部分はあるんだけれども、変に歪んじゃったというか。例えば、日本で右翼っていうと絶対明治以降の日本の姿を理想としているじゃん。右翼自身がそれを意識してるかどうかはわからないけど。大日本帝国を理想としてて、それ以前を理想化しない。江戸時代に戻れとか言わないわけじゃん。だからむしろ本当に愛国心があって考えるなら、そういう歴史の繋がりみたいなのをちゃんと意識して発言すればいいのに、みたいな。例えば皇国史観とかも、あれも明治以降にできた観念で、とにかくその時代をすごく美化している。

オ　本居宣長まで戻る右翼っていますからね。

マ　それもわかる。でもそんなこと言ったら、それこそ古代まで行き着いて。そういう歴史観を持てばいいんだけど。とにかく大日本帝国以降を美化しちゃっていて、そこにすごい歪みがあると思うんだよね。ナショナリズムというもの自体が。その歪みをいかにして直すか。直らない部分はあるんだけど。

オ　反原発って言うのは簡単なんだけれども、なぜ脱原発に舵を切れないかって言ったら、とりわけ日本人がどういうふうに舵を切っていったのかということにも原因があるだろうって話にもなってくるわけで、今回の原発問題で、いわゆるプロ市民じゃない人たちがデモとは言わない、パレードに関わっているというのが少し光かなと思っていて。普通の俳優が脱原発のリツイートをしていたりだとか。新宿の十八ｍの高さのところで放射線量を測ってんじゃないよだとか。だから本当にみんな生活に直結した形じゃないと困ってるじゃないですか。だからこれは息長く議論の元になっていけばいいなって。片や福島は早く助けないとって。

ク　こういうふうに変わってほしいなっていうのはあるけど、でも結局飽きっぽいところでなあなあで終わってしまうかもしれないっていうのはありますよね。

ワ　今は盛り上がってるけど、じゃあ一年後はどうなの？って言ったら、どうせ同じになるんでしょみたいな諦め的な考えもありますね。

オ　もちろんガンが多発したりだとか、奇形児が生まれて来たらどうなのかな？って

サ　被害が現勢化してないですからね。

オ　「ただちに」害はないですからね。

（二〇一一年六月十八日永山・新撰組にて）

玄牝上映会レポート

5月21日（土）ベルブホール

河瀬直美監督による「自然なお産」をめぐるドキュメンタリー『玄牝』を5月に上映することが決定したのは今年の2月中頃のこと。それから上映当日まで、思えば色々なことがありました。中でも一番大きなハードルはやはり震災。人々の意識が変化していく中、上映会を開催すべきか悩みましたがこの映画が人の生と死を真剣にみつめているからこそやりたいと思えました。

そして迎えた5月21日当日、河瀬監督はカンヌ映画祭に参加中のためスカイプを通じてのトークとなり、直前まで電話が繋がらずハラハラ。しかし、本番ではばっちり繋がって、寝起き（カンヌは早朝だった）にも関わらず、熱くなめらかなトークを繰り広げてくださいました。距離を越えて会場の空気を読み、常に問いかけの答え以上のお話をする監督、さすがです。最後には、「TAMAは映画好きが集まる映画祭という印象がある。今日の質問もとても的を得ていた。」という言葉に励まされました。

この日の2回目の上映は「あんしんシネマ」ということで、小さいお子様連れのお客様のためにござ&座布団でリラックス空間を作りました。これが大成功。くつろぎながら映画を観ている後ろ姿がかわいかったです。子供達は何を感じ取ったことでしょう。これからも色々な上映スタイルにチャレンジしていきたいです。

カンヌでも好評だった新作の『朱花（はねづ）の月』は9月3日（土）よりユーロスペースにて公開。お楽しみに。

（実行委員K）

▲くつろいで映画を鑑賞された観客の皆さん

シネマレビュー
CINEMA REVIEW
『ふゆの獣』

第8回TAMA NEW WAVE『かざあな』にてグランプリを受賞した内田監督の新作『ふゆの獣』（第11回東京フィルメックス最優秀作品賞受賞）がついに劇場公開された。

2年前監督にインタビューした時、これから撮影に入る新作について次のように語っていた。「『かざあな』と同じ形式だけど、今度は短期間で撮る。そのために脚本は用意するが、それは旅行のガイドブックのようなもの。演者には自由に旅して欲しい」

内田監督といえば半分ドキュメンタリーのような手法で時間をかけてじっくり作品を作り上げる（『かざあな』は制作期間4年）というイメージがあったため、どんな作品になるのだろうとその時から楽しみにしていた。観て感じたのは、濃縮された時間・空間がそこにあるということ。小さな世界で繰り広げられる逃げ場のないやり取りは息苦しいほどこちらを圧迫してくる。それだけではしんどい映画になってしまうところだが、この作品にはプラスアルファがあった。

ストーリーは、ごくシンプル。恋愛感情が絡んだ二組の男女が嘘をついたりつかれたりしながら修羅場を迎え、ぶつかり合ったその先を描いている。監督の「今回は撮りたいものを一気に撮る」という意気込みに俳優達が全身でついていったことが伝わった。どこかジョン・カサヴェテス作品を思わせるところもあり。

『ふゆの獣』は7月2日（土）よりテアトル新宿にてレイトショー公開中。連日21:10より上映。公開を記念してK's cinemaにて旧作『えてがみ』『かざあな』を上映。詳しくは『ふゆの獣』公式HPをご覧下さい。
→ http://www.loveaddiction.jp/

TAMA CINEMA FORUM INFORMATION

- **9月3日㈯、今年最後の特別上映会を行います。上映作品など詳細はHPその他でお知らせしていきます。**
- **第21回TAMA CINEMA FORUM映画祭は11/19㈯～11/27㈰に開催予定です。お楽しみに。**
- **支援会員募集中です。特別上映会の入場料が半額、映画祭パンフレット進呈などお得な特典付きです。**

たまシネマ通信　Issue Vol.1 July 2011　Issued by TAMA CINEMA FORUM
Editor in Chief *T. Sato*　Editorial Assistant *F. I*　Contributing Editors *TAMA CINEMA FORUM Staff*